

大学生用自殺親和状態尺度の作成の試み

竹内 綾*・兒玉憲一*

An attempt to develop a scale of suicidal inclination for college students

Aya Takeuchi* Kenichi Kodama*

The purpose of this study was to develop a scale to assess suicidal inclination of college students (SSI) based on the scale of suicidal inclination for junior high school students. The first step involved creating a provisional scale by modifying the original items. In this study, 261 college students completed SSI. The second step aimed to test the factor structure of SSI, and to select the final items. Factor analysis with varimax rotation indicated five factors: (a) physical and mental health problems, (b) depressive mood, (c) suicidal inclination, (d) low volition, and (e) with for loneliness consisting of 22 items. For these factors, Cronbach's alpha coefficients ranged from .40 to .73. The construct validity of SSI was investigated with three subscales of a scale of attitude toward death in adolescence (intention to live out own life, fear of death, meaning of death for life), and the criterion-related validity of SSI was investigated with the Center for Epidemiologic Studies Depression Scale. Finally, SSI with 22 items demonstrated internal consistency, and construct and criterion-related validity.

Keywords : suicide, suicidal inclination, college student

問題と目的

大学生の自殺問題の現状

警察庁 (2011) の発表によると、平成 22 年の全国の自殺者数は 31690 人であり、自殺者数が 3 万人を超えるのは 13 年連続であるという。このうち、学生・生徒の自殺者数は全体の 2.93% (928 人) を占めており、決して多くはないが、軽視できるものではない。また、なかでも大学生の自殺者数は 1.62% (513 人) と、学生・生徒の自殺者数の半数以上を占めている。さらに、厚生労働省 (2011) の発表によると、平成 22 年の調査では、年代別の死亡原因をみると、10 代後半から 20 代における主要な死因が自殺となっている。以上のデータを踏まえると、青年期における自殺問題は深刻なも

*広島大学大学院教育学研究科 (Graduate School of Education, Hiroshima University)

のであり、そのなかでも大学生における自殺問題は何らかの対策を要する緊急の課題であるといえる。

自殺の定義

自殺とは、自ら自分の命を絶つことであるが、大塚・瀬戸・菅野・上里（1998）によると、自殺の定義は各研究者によってその表現が微妙に異なり、一様ではないという。本研究では、大塚他（1998）に倣い、「成熟した人格」や、「死のうとする自らの意志」の判定は困難であるとして、広く“自己の生命を断とうとする行為”と定義した稲村（1977）を用いることとする。

自殺に関する研究

大塚他（1998）によると、これまでも、日本内外で自殺行動の予測と予防のための研究が多く行われてきたという。たとえば、既成の心理検査を用いたものとして、ロールシャッハによる記号研究（Martin, 1951；溝口, 1980）、ミネソタ多面人格目録によるプロフィール分析研究（Devries & Farberow, 1967）、矢田部ギルフォード性格検査を用いたもの（川畑・勝部, 1958；岩切・荒記・村田, 1987）、デブリース尺度（Devries, 1966）、ベック自殺念慮尺度（SSI; Beck, Kovacs & Weissman, 1979; SSI-W; Beck, Brown, Steer, Dahlsgaard & Grisham, in press）、及びニューフィット時間質問紙（Yufit & Benzie, 1973）が挙げられている。

しかし、これまで研究で用いられた尺度において、その妥当性や信頼性は十分に証明されておらず、さらに、日本における自殺の予測研究は少ない。しかし、社会文化的な環境の相違を考えると、海外で開発された尺度をそのまま用いることはできない。

そこで、大塚他（1998）は、自殺行動を予測する変数として自殺念慮を取り上げ、すでに信頼性と妥当性の検証がされている *the Suicide Ideation Scale*（Beck *et al.*, 1979）を参考に、大学生を対象とした自殺念慮尺度の作成を試みた。さらに、自殺念慮と深く関わるものとして「抑うつ」、「孤独感」、「喪失体験」、「ソーシャル・サポート」、「自尊感情」を取り上げ、自殺念慮に関連する要因を検討している。その結果、自殺念慮に影響を与える要因には性差があり、男子では自尊感情、女子ではソーシャル・サポートが深く関与していることが明らかとなった。しかし、彼らは、臨床群を対象として開発された尺度を参考にして作成した尺度を一般の大学生に実施したため、得点の偏りが著しく、ほとんどの者が自殺念慮が低い群に分類される結果となった。大塚・熊野・瀬戸・上里（2001）によると、これまでも自殺行動の予測のための尺度が作成されてきたが、その多くは病院臨床での利用のための尺度であり、自殺の危険性が高い者だけを抽出するに止まり、潜在的に自殺の危険性を持った者を多く見逃してきたという問題が残されているという。

そこで、大塚他（2001）は自殺念慮を臨床群に特有の問題としてではなく、誰にでもみられる特徴であると考え、健常群を対象に、自殺の危険性がある者を早期発見することを目的とする自殺親和状態尺度の開発を試みている。この尺度は中学生を対象とし、彼らが日常生活の中で、自殺に関係の深い気分や考え、自殺念慮をどれだけもっているか、また、自殺のサインといわれる自殺企図、身体症状、行動をどれだけ表出しているかを測定し、彼らがどの程度死へ向かう危険な状態にいるのかを知る手掛かりを得ようとするものである。

本研究の目的

本研究では、大塚他（2001）の自殺親和状態尺度を、大学生を対象に実施し、大学生用自殺親和状態尺度の作成、およびその信頼性と妥当性の検討を行うことを目的とする。なお、尺度の妥当性については、死に対する態度を多面的な視点から捉え、これを測定することができる丹下（1999）の青年期における死に対する態度尺度を用いて検討する。さらに、自殺がうつ状態と関連があることが多くの研究で報告されているとする大塚他（2001）を参考に、自殺親和状態に深く関わるものとして抑うつを取り上げ、抑うつ性自己評価尺度（CES-D）を併せて実施し、本尺度の妥当性を検討する。

方法

調査対象者

4年制大学の学生計261名（男性112名、女性148名、不明1名）、そのうち欠損値の多かった19名を除き、242名を分析対象とした。分析対象者の学年は3年生233名、4年生9名、年齢の平均値は20.83歳（ $SD=0.70$ ）、性別は男性106名、女性136名であった。

調査手続き

2010年11月に、大学の講義時間を利用して無記名自記式質問紙調査を集団で実施し、その場で回収した。

項目作成

大塚他（2001）の自殺親和状態尺度が中学生を対象として作成されたものであるため、大学生に実施するのにふさわしくない項目内容は改変し、仮尺度を作成した。具体的には、中学生は家族と同居しているのに対し、大学生の多くは一人暮らしをしていると考えられることから、「孤独希求」因子に含まれる項目「家を出たい」、「家にいたくない」を「家族から離れて一人になりたい」、「家族に会いたくない」に変更した。さらに、「健全な心身」因子に含まれる項目「クラブ活動や生徒会活動を熱心に行っている」を「サークル活動を熱心に行っている」に変更した。

質問紙の構成

大学生の自殺親和状態を測定する尺度 大学生用自殺親和状態仮尺度（以下、本尺度）を使用。「自殺への抵抗力」（6項目、得点範囲6点-24点）、「抑うつの行動」（7項目、得点範囲7-28点）、「抑うつ気分」（5項目、得点範囲5-20点）、「自殺への親和性」（7項目、得点範囲7-28点）、「孤独希求」（4項目、得点範囲4-16点）、「健全な心身」（4項目、得点範囲4-16点）の6因子、計33項目、得点範囲33-132点。「全く違う（1点）」から「その通りだ（4点）」までの4件法。得点が高いほど自殺に親和している状態を表す。

青年期における死に対する態度を測定する尺度 青年期における死に対する態度尺度（丹下，1999）のうち、「死に対する恐怖尺度」（11項目、得点範囲11-55点、高得点ほど死を恐れることを意味する）、「生を全うさせる意志尺度」（8項目、得点範囲8-40点、高得点ほど生き続けたがることを意味する）、「人生に対して死がもつ意味尺度」（6項目、得点範囲6-30点、高得点ほど死に意味を認めることを意味する）の3因子、計25項目、得点範囲25-125点。「全くそう思わない（1点）」か

ら「非常にそう思う (5点)」までの5件法。

抑うつ自己評価を測定する尺度 抑うつ性自己評価尺度 (島・鹿野・北村・浅井, 1985, CES-D)。1因子, 20項目, 得点範囲 0-60点。この一週間のからだや心の状態について尋ねるもので, 「全くない (0点)」, 「週のうち1-2日 (1点)」, 「週のうち3-4日 (2点)」, 「週のうち5日以上 (3点)」の4件法。

属性 性別, 年齢, 学年について尋ねた。

結果

各尺度の記述統計量 各尺度の男女別の尺度得点, 下位尺度得点の平均値, *SD* を Table 1 に示した。

Table 1
自殺親和状態尺度の記述統計量

性別	尺度	下位尺度	平均値	<i>SD</i>
男性	自殺親和状態仮尺度	自殺への抵抗力	11.94	4.02
		抑うつの行動	14.96	3.79
		抑うつ気分	9.49	3.15
		自殺への親和性	14.58	3.56
		孤独希求	8.36	2.45
		健全な心身	8.52	2.58
		尺度得点	67.88	14.09
	CES-D	尺度得点	15.16	11.21
	死に対する態度尺度	死に対する恐怖	37.00	9.36
		生を全うさせる意志	31.02	6.19
人生に対して死がもつ意味		20.40	4.51	
女性	自殺親和状態仮尺度	自殺への抵抗力	11.90	4.21
		抑うつの行動	15.80	3.75
		抑うつ気分	11.62	3.37
		自殺への親和性	14.62	3.53
		孤独希求	7.83	2.06
		健全な心身	8.55	2.73
		尺度得点	70.32	13.71
	CES-D	尺度得点	18.27	9.73
	死に対する態度尺度	死に対する恐怖	38.35	8.94
		生を全うさせる意志	31.50	5.54
人生に対して死がもつ意味		20.96	3.34	

自殺親和状態尺度の信頼性と妥当性の検討

性差の検討 本研究で使用した自殺親和状態仮尺度, 死に対する態度尺度及び CES-D のそれぞれにおいて, 性差を検討するために *t* 検定を行った。その結果, 自殺親和状態仮尺度, 死に対する態度尺度においては性差は認められず, CES-D においてのみ性差が認められた (Table 2)。

Table 2
各尺度のt検定の結果

尺度	下位尺度	df	t値	高低差
自殺親和状態仮尺度	尺度得点	240	-1.36 n.s.	男性<女性
CES-D	尺度得点	240	-2.31 *	男性<女性
死に対する態度尺度	死に対する恐怖	240	-1.14 n.s.	男性<女性
	生を全うさせる意志	240	-6.37 n.s.	男性<女性
	人生に対して死がもつ意味	240	-1.11 n.s.	男性<女性

* $p < .05$

自殺親和状態尺度の因子分析と主成分分析 自殺親和状態仮尺度の原版（大塚他，2001）は中学生対象に作成されている。大学生版を作成するため，原版の作成過程に従い，因子構造を明らかにした。各項目の得点に基づいて，主成分法，バリマックス回転による主成分分析を行った。因子数の決定においては，固有値の大きさの変化や各因子に含まれる項目数，および各因子に含まれる項目の内容などを考慮した。これより，5因子を採用し，再度分析を行った。下位尺度化に際しては，①因子負荷量が.40以上，②共通性が.20以上という基準に基づいて項目を選択した。この結果，仮尺度33項目のうち，11項目は削除となり，解釈可能な5因子22項目が抽出された（Table 3）。

第Ⅰ因子に含まれる項目は「よく眠れる」，「食欲がある」など逆転項目5項目で構成され，「心身の不調」因子とした。第Ⅱ因子に含まれる項目は「ときどき泣きたくなったり，涙ぐんだりする」，「いらいらする」など5項目で構成され，「抑うつ気分」因子とした。第Ⅲ因子に含まれる項目は「自殺の方法（手段）について考えたことは一度もない」，「遺書を書くなんて考えたこともない」など逆転項目6項目で構成され，「自殺への親和」因子とした。第Ⅳ因子に含まれる項目は「成績が下がりがちである」，「勉強が手につかない」など3項目で構成され，「意欲低下」因子とした。第Ⅴ因子に含まれる項目は「もしも自殺について考えたとしても，そのことを人には話さない」，「一人きりでいたい」など3項目で構成され，「孤独希求」因子とした。

さらに，念のために主因子法，プロマックス回転による因子分析を行った。因子数の決定においては，主成分法と同様に，固有値の大きさの変化や各因子に含まれる項目数，および各因子に含まれる項目の内容などを考慮した。これより，4因子を採用し，再度分析を行った。下位尺度化に際しては，①因子負荷量が.35以上，②共通性が.20以上という基準に基づいて項目を選択した。この結果，仮尺度33項目のうち，13項目は削除となり，解釈可能な4因子20項目が抽出された（Table 4）。

第Ⅰ因子に含まれる項目は「ときどき泣きたくなったり，涙ぐんだりする」，「わけもなく悲しくなることがある」など6項目で，「抑うつ気分」因子とした。第Ⅱ因子に含まれる項目は「家族から離れて一人になりたい」，「家族に会いたくない」など逆転項目を含む6項目で構成され，「孤独希求・健全な心身」因子とした。第Ⅲ因子に含まれる項目は「自殺の方法（手段）について考えたことは一度もない」，「自分が死んだら家族や友達はとも悲しむと思うので，自殺なんて考えない」など逆転項目を含む4項目で構成され，「自殺への親和」因子とした。第Ⅳ因子に含まれる項目は「成績が下がりがちである」，「勉強が手につかない」など4項目で構成され，「意欲低下」因子とした。

また，原版の項目内容を Table 5 に示した。

Table 3

自殺親和状態仮尺度主成分分析結果(主成分法, バリマックス回転)

		尺度全体 $\alpha=.815$				
質問項目	I	II	III	IV	V	
I. 心身の不調 ($\alpha=.690$)						
30よく眠れる(R)	.678	-.190	-.013	-.062	.031	
31食欲がある(R)	.676	-.068	-.088	.038	-.037	
32自殺はするべきではないと思う(R)	.629	-.021	-.302	.134	-.229	
12最近楽しい(R)	.613	-.282	-.084	-.143	-.073	
1生きたいと思う気持ちが、死にたいと思う気持ちよりも強い(R)	.554	.034	-.094	-.112	-.092	
II. 抑うつ気分 ($\alpha=.731$)						
11ときどき泣きたくなったり、涙ぐんだりする	.016	.730	.322	-.050	-.110	
2いらいらする	-.230	.677	-.086	.117	.205	
19最近ぐちっぽく、弱気である	-.179	.676	.079	.259	.133	
18気分が変わりやすい	-.112	.622	.135	.057	.103	
5自分は一人ぼっちだとさみしく感じる	-.015	.564	.191	.174	-.201	
III. 自殺への親和 ($\alpha=.697$)						
3自殺の方法(手段)について考えたことは一度もない(R)	.338	.023	-.680	-.155	.138	
20遺書を書くなんて考えたこともない(R)	.313	-.041	-.637	-.008	.118	
29死ぬことを他のことと比べて考えることがある(例:「死ぬより我慢することのほうがましだ」と考えることなど)	.084	.104	.567	.195	.074	
21死後の世界についてよく考える	.046	.266	.548	-.047	.100	
23自殺の報道を目にすると、自殺した人の気持ちがよくわかる	-.167	.197	.547	-.072	.349	
13死んだらいろいろなことから逃れられて楽だろうなあと思う	-.221	.143	.513	.182	.308	
IV. 意欲低下 ($\alpha=.642$)						
28成績が下がりがちである	-.175	.065	.129	.784	.007	
27勉強が手につかない	-.096	.224	.052	.746	.003	
15朝起きようと思っても、なかなか起きられない	.088	.080	.051	.678	.043	
V. 孤独希求 ($\alpha=.401$)						
22もしも自殺について考えたとしても、そのことを人には話さない	.124	-.167	.062	-.070	.711	
16一人きりでいたい	-.308	.163	.213	.207	.568	
4家族から離れて一人になりたい	-.309	.216	-.031	.044	.549	
寄与率(%)	22.52	8.91	6.92	6.54	5.94	

(R)は逆転項目

Table 4

自殺親和状態仮尺度因子分析結果(主因子法, プロマックス回転)

尺度全体 $\alpha=.842$

質問項目	I	II	III	IV
I. 抑うつ気分($\alpha=.791$)				
11ときどき泣きたくなったり, 涙ぐんだりする	.865	-.195	.085	-.157
24わけもなく悲しくなることがある	.786	-.065	.118	-.067
19最近ぐちっぽく, 弱気である	.545	.142	-.076	.177
18気分が変わりやすい	.517	.097	-.036	.019
2いらいらする	.490	.292	-.171	.027
5自分は一人ぼっちだとさみしく感じる	.452	-.106	.017	.130
II. 孤独希求・健全な心身($\alpha=.707$)				
4家族から離れて一人になりたい	-.027	.737	-.128	-.102
33家族に会いたくない	-.106	.722	.035	-.096
16一人きりでいたい	.022	.436	.046	.148
31食欲がある(R)	-.028	.420	.164	-.050
12最近楽しい(R)	.085	.385	.178	.059
30よく眠れる(R)	.004	.367	.132	.091
III. 自殺への親和($\alpha=.720$)				
3自殺の方法(手段)について考えたことは一度もない(R)	-.074	-.087	.811	.108
7自分が死んだら家族や友だちはとても悲しむと思うので, 自殺なんて考えない(R)	.037	.196	.612	-.155
20遺書を書くななんて考えたこともない(R)	.063	-.006	.544	-.010
13死んだらいろいろなことから逃れられて楽だろうなあと思う	.125	.144	.385	.058
IV. 意欲低下($\alpha=.677$)				
28成績が下がりがちである	-.132	-.031	.110	.755
27勉強が手につかない	.024	.053	-.068	.657
15朝起きようと思っても, なかなか起きられない	.046	-.139	-.017	.528
25朝になっても疲れが残っている	.289	.023	-.033	.395
寄与率(%)	26.08	9.84	7.73	7.16

(R)は逆転項目

Table 5
自殺親和状態仮尺度の原版

尺度全体 $\alpha=.872$

I. 自殺への抵抗力($\alpha=.724$)

- 1 生きたいと思う気持ちが、死にたいと思う気持ちよりも強い(R)
- 3 自殺の方法(手段)について考えたことは一度もない(R)
- 7 自分が死んだら家族や友だちはとても悲しむと思うので、自殺なんて考えない(R)
- 20 遺書を書くなんて考えたこともない(R)
- 26 もしも、死にたいと思っても、積極的に自殺をしたいという欲求はない(R)
- 32 自殺はするべきではないと思う

II. 抑うつ的行動($\alpha=.700$)

- 2 いらいらする
- 10 学校をやめたいと思うことがある
- 15 朝起きようと思っても、なかなか起きられない
- 18 気分が変わりやすい
- 25 朝になっても疲れが残っている
- 27 勉強が手につかない
- 28 成績が下がりがちである

III. 抑うつ気分($\alpha=.754$)

- 5 自分は一人ぼっちだとさみしく感じる
- 6 誰にも打ち明けられない悩みがある
- 11 ときどき泣きたくなったり、涙ぐんだりする
- 19 最近ぐちっぽく、弱気である
- 24 わけもなく悲しくなることがある

IV. 自殺への親和性($\alpha=.621$)

- 13 死んだらいろいろなことから逃れられて楽だろうなあと思う
- 14 人の死のニュース、死亡記事について関心がある
- 17 死にたいわけではないが、楽になりたいと思うことがある
- 21 死後の世界についてよく考える
- 22 もしも自殺について考えたとしても、そのことを人には話さない
- 23 自殺の報道を目にすると、自殺した人の気持ちがよくわかる
- 29 死ぬことを他のことと比べて考えることがある(例:「死ぬより我慢することのほうがまだ」)と考えることなど)

V. 孤独希求($\alpha=.566$)

- 4 家族から離れて一人になりたい
- 8 一人で旅に出たいと思うことがある
- 16 一人きりでいたい
- 33 家族に会いたくない

VI. 健全な心身($\alpha=.599$)

- 9 サークル活動を熱心に行っている(R)
- 12 最近楽しい(R)
- 30 よく眠れる(R)
- 31 食欲がある(R)

(R)は逆転項目

大学生用自殺親和仮尺度の信頼性の検討 本尺度の内的整合性を調べるために、主成分分析、主因子法、原版のそれぞれについて Cronbach の α 係数を算出した。主成分分析で得られた結果においては、「孤独希求」を除いては、.64 から.73 という信頼性係数が得られ、内部一貫性があることが明らかにされた (Table 3)。しかし、「孤独希求」については.40 となり、かなり低い結果となった。主因子法で得られた結果においては、.68 から.79 という信頼性係数が得られ、内部一貫性があることが明らかにされた (Table 4)。原版で得られた結果においては、.57 から.75 という信頼性係数が得られ、内部一貫性があることが明らかにされた (Table 5)。

因子的妥当性の確認 主成分法バリマックス回転で得られた 5 因子構造モデル、主因子法プロマックス回転で得られた 4 因子構造モデル及び大塚他 (2001) の原版 6 因子構造モデルの適合度指標を算出し、3 つのモデルを比較した。その結果、5 因子構造モデルでは GFI=.902, AGFI=.875, RMSEA=.046, 4 因子構造モデルでは GFI=.880, AGFI=.846, RMSEA=.066, 原版 6 因子構造モデルでは GFI=.815, AGFI=.783, RMSEA=.060 という値が得られた。これより、本研究では主成分分析で得られた 5 因子構造モデルを使用することとした。

大学生用自殺親和仮尺度の妥当性の検討 大学生用自殺親和状態仮尺度の構成概念妥当性及び基準関連妥当性を検討するため、大塚他 (2001) に倣い、本尺度と死に対する態度尺度、本尺度と CES-D との相関を検討した。

(1) 構成概念妥当性

本尺度は高得点ほど強く自殺に親和している状態を表わすよう得点化しているため、死に対する態度尺度のうち、「生を全うさせる意志」と「死に対する恐怖」との間に負の相関、「人生に対して死がもつ意味」との間に正の相関を想定できる。両尺度の尺度得点及び下位尺度得点間の相関係数を算出したところ、Table 6 のような結果となった。まず、大学生用自殺親和状態仮尺度の尺度得点と死に対する態度尺度の各下位尺度との相関では、「人生に対して死がもつ意味 ($r=.42, p<.01$)」との間に正の相関、「生を全うさせる意志 ($r=-.42, p<.01$)」、「死に対する恐怖 ($r=-.32, p<.01$)」との間には負の相関が得られ、弱いあるいは中程度の相関が認められた。次に、大学生用自殺親和状態仮尺度の下位尺度と死に対する態度尺度の下位尺度との相関を検討した。「心身の不調」では、「生を全うさせる意志 ($r=-.49, p<.01$)」、「死に対する恐怖 ($r=-.38, p<.01$)」との間に中程度の負の相関が認められた。「抑うつ気分」では、「生を全うさせる意志 ($r=-.17, p<.01$)」との間に弱い負の相関、「人生に対して死がもつ意味 ($r=.38, p<.01$)」との間に中程度の正の相関が認められた。「自殺への親和」では、「生を全うさせる意志 ($r=-.36, p<.01$)」「死に対する恐怖 ($r=-.33, p<.01$)」との間に中程度の負の相関、「人生に対して死がもつ意味 ($r=.39, p<.01$)」との間に中程度の正の相関が認められた。「意欲低下」では、「人生に対して死がもつ意味 ($r=.25, p<.01$)」との間に弱い正の相関が認められた。「孤独希求」では、「生を全うさせる意志 ($r=-.16, p<.05$)」との間に弱い負の相関、「人生に対して死がもつ意味 ($r=.31, p<.01$)」との間に中程度の正の相関が認められた。したがって、本尺度には、構成概念妥当性が確認された。

Table 6

自殺親和状態仮尺度と死に対する態度尺度の相関係数			
下位尺度	I. 生を全うさせる意志	II. 死に対する恐怖	III. 人生に対して死がもつ意味
I. 健全な心身	-.49 **	-.38 **	.05
II. 抑うつ気分	-.17 **	-.10	.38 **
III. 自殺への親和	-.36 **	-.33 **	.39 **
IV. 抑うつの行動	-.08	-.04	.25 **
V. 孤独希求	-.16 *	-.10	.31 **
合計得点	-.42 **	-.32 **	.42 **

* $p < .05$, ** $p < .01$

(2) 基準関連妥当性

大塚他（2001）に倣い、本尺度の基準関連妥当性を検討するために、本尺度と CES-D との相関を算出した（Table 7）。まず、本尺度の尺度得点と CES-D の間では、強い正の相関が認められた（ $r = .78$, $p < .01$ ）。次に、本尺度の下位尺度と CES-D の相関では、「心身の不調（ $r = .61$, $p < .01$ ）」因子、「抑うつ気分（ $r = .69$, $p < .01$ ）」因子、「自殺への親和（ $r = .50$, $p < .01$ ）」因子、「意欲低下（ $r = .42$, $p < .01$ ）」因子との間に中程度の正の相関が認められた。「孤独希求（ $r = .25$, $p < .01$ ）」因子については弱い正の相関が認められた。したがって、本尺度に、基準関連妥当性が確認された。

Table 7

自殺親和状態仮尺度と CES-D の相関係数	
下位尺度	CES-D
I. 健全な心身	.61**
II. 抑うつ気分	.69**
III. 自殺への親和	.50**
IV. 抑うつの行動	.42**
V. 孤独希求	.25**
合計得点	.78**

** $p < .01$

考察

尺度の構成

本研究では、主成分法バリマックス回転によって得られた 5 因子構造モデル、主因子法プロマックス回転によって得られた 4 因子構造モデル及び大塚他（2001）による原版 6 因子構造モデルの 3 つのモデルを比較し、大学生用自殺親和状態尺度とするのに最も適した尺度の作成、及び作成した尺度の信頼性・妥当性の検討を行うことを目的とした。

それぞれの尺度における信頼性係数を比較すると、尺度全体の信頼性係数においてはいずれも十分な値であった。また、各下位尺度の信頼性係数をみると、4 因子構造モデル、原版 6 因子構造モデルにおいてはどの下位尺度も十分な値であった。しかし、5 因子構造モデルでは、「孤独希求」のみ低

い値となり、その他の下位尺度についてはほぼ満足のいく結果が得られた。次に、それぞれのモデルの適合度指標を比較すると、5因子構造モデルにおいて最も高い値が得られた。これらの結果より、信頼性の低い下位尺度を含むという点で不安定な構造ではあるものの、主成分法バリマックス回転によって得られた5因子構造モデルの尺度を採択することとした。

信頼性と妥当性の検討

まず、本研究で作成した大学生用自殺親和状態尺度の信頼性について検討する。Cronbach の α 係数を算出したところ、「孤独希求」についてはかなり低い結果となったが、その他については、ほぼ満足のいく結果となった。これは、「孤独希求」因子に含まれる項目数が3項目と少ないことに関連していると考えられる。また、原版の自殺親和状態尺度は、両親と同居している中学生を対象として作成されている。しかし、大学生の多くは一人暮らしをしていると考えられる。そこで、本研究では大学生にふさわしくないと考えられる項目内容を一部変更した。しかし、変更した項目が「孤独希求」という概念を測定出来ていなかったため、このような結果となったと考えられる。今後の研究においては、項目内容の見直しを行い、さらに項目数を増やすなどして、信頼性を高めていくことが課題である。

次に、尺度の妥当性について検討する。本研究では、本尺度と死に対する態度尺度及びCES-Dとの相関を検討することによって、構成概念妥当性及び基準関連妥当性を検討する。本尺度は高得点ほど強く自殺に親和している状態を表わすよう得点化しているため、死に対する態度尺度のうち、「生を全うさせる意志」と「死に対する恐怖」との間に負の相関、「人生に対して死がもつ意味」との間に正の相関、さらに、CES-Dとの間に正の相関を想定できる。本尺度と死に対する態度尺度との相関では、尺度得点においては、「生を全うさせる意志」や「死に対する恐怖」とは負の相関、「人生に対して死がもつ意味」とは正の相関が認められた。さらに、各下位尺度得点においては、「心身の不調」、「抑うつ気分」、「自殺への親和」、「孤独希求」と「生を全うさせる意志」との間に有意な負の相関、「心身の不調」、「自殺への親和」と「死に対する恐怖」との間に有意な負の相関、「抑うつ気分」、「自殺への親和」、「意欲低下」、「孤独希求」と「人生に対して死がもつ意味」との間に有意な正の相関がみられた。下位尺度においてバラつきはあるものの、これらの結果は想定した通りのものとなり、これより、本尺度は構成概念妥当性を有するといえる。また、CES-Dとの相関では、尺度得点において有意な正の相関がみられた。下位尺度においては、下位尺度ごとに相関の強さに差がみられたものの、全て有意な正の相関がみられた。これより、本尺度は基準関連妥当性を有するといえる。大塚他(2001)においても、下位尺度によってCES-Dとの相関の大きさに違いが認められている。大塚他(2001)は、相関の大きさに違いがみられたことから、既存の抑うつ尺度で捉えられるものと同様の心理的特徴と、それとある程度区別される自殺親和状態に関わる要因の両者を評価することが可能であると考えられ、弁別的妥当性を有すると判断できると結論付けている。本研究では先行研究と同様の結果が得られたことから、本尺度においても、弁別的妥当性が確認されたといえる。

これらのことから、本尺度の信頼性については、下位尺度の「孤独希求」を除けば一定の水準に達していると判断できる。また、本尺度の妥当性は一定の水準に達していると判断でき、大学生の自殺親和状態を捉えるのに有用な尺度であるといえる。

原版との比較

原版である中学生用自殺親和状態尺度は、6 因子 33 項目から構成されていた。しかし、本研究で作成した大学生用自殺親和状態尺度は 5 因子 22 項目という構成になった。ここで、中学生版と大学生版における違いを検討する。

まず、項目数と項目内容について検討する。中学生版では、大学生を対象に実施するのに不適切であると考えられる項目内容を一部変更した。さらに、主成分分析及び因子分析を行う際に、改めて項目内容を見直し、内容が不適切であると判断した項目については、あらかじめ除外して分析を行った。具体的には、「サークル活動を熱心に行っている」、「人の死のニュース、死亡記事について関心がある」、「もしも、死にたいと思っても、積極的に自殺をしたいという欲求はない」、「家族に会いたくない」という 4 項目について、不適切と判断した。このような作業の過程で、中学生版よりも大学生版において、項目数が減少することとなった。

次に、因子構造の違いについて検討する。中学生版は 6 因子構造であったのに対し、大学生版では 5 因子構造となった。具体的には、中学生版では「自殺への抵抗力」、「自殺への親和性」と二つに分かれていた因子が、大学生版では「自殺への親和」という一つにまとまったのである。これにより、自殺に関する項目数は中学生版より大学生版の方が少なくなっている。

また、原版では「抑うつ行動」、「抑うつ気分」因子において項目が混在していたことから、本研究においては項目内容を見直し、因子名を「意欲低下」と「抑うつ気分」へと変更した。また、原版では「健全な心身」と命名されていた因子についても、全項目が逆転項目から構成されていることを考慮し、「心身の不調」という因子名に変更した。

今後の課題

先に述べたように、本研究で作成した尺度には、信頼性の低い下位尺度「孤独希求」が含まれている。今後の研究においては、さらに新たな項目を加えるなどして信頼性を高め、より安定した尺度を構成していくことが必要である。

さらに、本研究で作成した大学生用自殺親和状態尺度を用いて、自殺親和状態にある学生の心理的特徴を捉え、自殺に関連する心理的要因を検討することも必要である。たとえば、大塚他（1998）においては、「抑うつ」、「孤独感」、「喪失体験」、「ソーシャル・サポート」、「自尊感情」を取り上げ、自殺念慮との関連を検討している。このように、自殺親和状態と関連があると考えられる要因を探ることで、見逃されがちなサインを早期に捉え、自殺を未然に防ぐための有用な手掛かりを得ることができると考えられる。

本研究の結果からも分かるように、自殺は抑うつとかなり深い関連があると考えられる。大塚他（2001）においても述べられているように、抑うつ状態のような精神的に不安定な状態を、青年期にありがちな一過性のものであると捉えるのではなく、それが自殺念慮や自殺企図にまで結び付く恐れがあるということに十分に注意しなければならない。また、本尺度は、学生が自殺問題を身近に捉え、自らの問題として考えるための契機ともなるであろう。本尺度を実施することによって、周囲や、さらには本人が、現在の状況を適切に把握し、自殺について考え、十分なサポートを受けられる体制作りをしていくことが、自殺予防のための一助となるであろう。

引用文献

- Beck, A.T., Brown, G.K., Steer, R.A., Dahlsgaard, K.K. & Grisham, J.R. (1999) Suicide ideation at its worst point: A predictor of eventual suicide in psychiatric outpatients. *Suicide and Life-Threatening Behavior*, **29**, 1-9.
- Beck, A.T., Kovacs, M. & Weissman, A. (1979). Assessment of suicidal ideation: The scale for suicide ideation. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **47**, 343-352.
- Devries, A. (1966). A potential suicide personality inventory. *Psychological Reports*, **18**, 731-738.
- Devries, A.G. & Farberow, N.L. (1967). Amultivariate profile analysis of MMPIs of suicidal and nonsuicidal neuropsychiatric patients. *Journal of Projective Techniques & Personality Assessment*, **31**(5), 81-84.
- 稲村 博 (1977). 自殺学：その治療と予防のために 東京大学出版
- 岩切美千代・荒記俊一・村田勝敬 (1987). 自殺念慮者(女子大学生)の性格特性：矢田部・ギルフオードテストを用いた症例・対照研究 日本公衆衛生雑誌, **34**(2), 81-83.
- 川畑愛義・勝部篤美 (1958). 自殺を中心とした学生の精神衛生に関する研究(1) 体育学研究, **3**(3), 98-103.
- 警察庁 (2011). 平成 22 年中における自殺の概要資料 警察庁 2011 年 3 月 3 日
<<http://www.npa.go.jp/safetylife/seianki/H22jisatsunogaiyou.pdf>>, (2011 年 12 月 9 日)
- 厚生労働省 (2011). 平成 22 年人口動態統計月報年計(概数)の概況 厚生労働省 2011 年 6 月 1 日
<<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai10/toukei07.html>>, (2011 年 12 月 9 日)
- Martin, H. (1951). A Rorschach study of suicide. unpublished Doctoral Dissertation, University of Kentucky.
- 溝口純二 (1980). ロールシャッハ・テストと自殺指標(「ロールシャッハ・テスト研究」編集委員会編 ロールシャッハ研究 22) 金子書房 135-150.
- 大塚明子・熊野宏昭・瀬戸正弘・上里一郎 (2001). 中学生の自殺親和状態尺度作成の試み カウンセリング研究, **34**, 21-30.
- 大塚明子・瀬戸正弘・菅野 純・上里一郎 (1998). 自殺念慮尺度の作成と自殺念慮に関連する要因の研究 カウンセリング研究, **31**, 247-258.
- 島 悟・鹿野達男・北村俊則・浅井昌弘 (1985). 新しい抑うつ性自己評価尺度について 精神医学, **27**, 717-723.
- 丹下智香子 (1999). 青年期における死に対する態度尺度の構成および妥当性・信頼性の検討 心理学研究, **70**, 327-332.
- Yufit, R.I. & Benzies, B. (1973). Assessing suicidal potential by time perspective. *Life-Threatening Behavior*, **3**, 270-282.